



串珠杯及び酒宴記録帖
当館蔵（びいどろ史料庫コレクション）



串珠杯酒宴記録帖

当館蔵（ひいどろ史料庫コレクション）

一吸一杯

他之轉念、
習他、願盡
和戰、深為
為刀、腰、肘、膝、
立神、在、



串珠杯酒宴記録帖
当館蔵（びいどろ史料館コレクション）

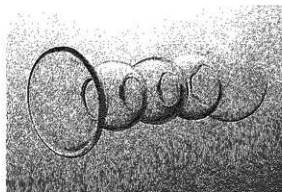


串珠杯酒宴記録帖
当館蔵（ひいどろ史料館コレクション）

【資料紹介】串珠杯の酒宴記録帖について(一)

中山 創太

本稿で採りあげる「串珠杯」は、四つの球体が連なり、その上部にランパ状の盃がついた変わった形のガラス製の容器。収納箱の蓋には、墨書で「串珠杯」とある①。串に刺さった珠を連想して名付けられたのだろう。注がれたお酒を飲み干すまで杯を床に置くことができない「可盃」の一つで、弦朝顔ガラス盃などと同様に、酒宴を盛り上げるための趣向が凝らされた酒器の一つである(左図)。本資料は、二〇一一年に神戸市立博物館に寄贈されたびいどろ史料庫コレクションに含まれるもので、既にガラス関連の展覧会などで紹介されてきた②。ところが、串珠杯とともに伝来する四冊の酒宴記録帖(以下、「記録帖」と略



串珠杯 江戸時代後期

神戸市立博物館蔵(びいどろ史料庫コレクション)

書を揮毫し、小品の画を描いて、ひとときを楽しく過ごす」席書・席面系統の書面会を記録したものの一つといえるかもしれない③。記録のなかには、文字が判読できないほどに乱れたものもあり、その盛況ぶりが生々しく伝わってくる。記録帖は、串珠杯がいつごろ使用されたものなのか、どのような人々に使用されていたかなど、モノそのものからはみえてこない、資料の伝来を知る上で貴重な情報を含んでいるといえる。

前述の通り、串珠杯とともに残る記録帖は四冊。全て折帖仕立てとなっている。一部前後する時期や重複する時期がみられるものの、概ね時代順に記録がまとまっている。仮に時代順に甲・乙・丙・丁と名称を付して整理すると、以下のようになる。

甲：文化元々明治三年(一八〇四〜七〇)

乙：安政四元治元年(一八五七〜六四)

丙：明治一四〜三三年(一八八一〜一九〇〇)

丁：明治三八〜三九年(一九〇五〜〇六)

これを信用するならば、およそ一〇〇年間の記録が収められていることになる。もういガラス製の串珠杯が今日まで伝来していることにも驚かされる④。記録には、酒宴の開催年月日、場所、参加者の名前を確認でき、なかには即興的に揮毫されたと思われる詩書画もみられる。なお、記録の中心は、酒を注いだ串珠杯を何息で飲み干せるかという点で、例えば三回の息継ぎで酒を飲み干した場合「三吸一杯」、息継ぎ無しで一気に飲み干した場合は「一吸一杯」といった文言が紙幅の多くを占めている。なかには、飲み方につい

て「見事」、「見苦しい」、「鯨飲」などと飲む人の様子を記したものを確認でき、目を通して思うすくすりとさせられる。

本稿では四冊の内、安政四・元治元年の酒宴が記録された乙巻をみていくことにする。乙巻で注目されるのは、江戸時代後期の豊後出身の儒家・廣瀬旭莊（文化四く文久三年・一八〇七く六三）の名前を確認できることである。彼が参加した酒宴記録を中心に、当時の文化人の交流をみていきたい。

はじめに、乙巻の概略を確認しておく、装丁は折帖で、寸法は縦一五・八釐、横八・〇釐、厚一・四釐。見開き二頁を使用した「串珠」（図一）の文字から始まり、安政四く元治元年にかけて催された一件の酒宴記録が収められている（記録の全文は、巻末を参照）。記録の中心を占める串珠杯を何息で飲むことができたのかという酒興は、「金瓶」⑤による序文「五段杯酒令序」から、中国・唐代に起源を持つ「酒令」にちなむものと考えられる。「酒令」とは、「はじめに令官を選び、その命令に従い遊戯を行い、負けた者には酒を飲んだり、歌を歌うなどの罰則が科せられる」もので、酒宴を盛り上げるための遊戯の総称であるという⑥。

乙巻にみられる酒宴の参加者は三五名（複数回名前がみられる人物を含む）。江戸時代末期に刊行されていた人名録などから得られた情報を加えて、まとめたものが表1となる。参加者は、①大坂で活動を行っていた人物、②人名録に儒家、書家、詩家などとして掲載されている文化人、③廣瀬旭莊を中心に、彼と交遊を持った人物が含まれることなどが特徴として挙げられよう。

ここで、旭莊の名がみられる安政五年（一八五八）六月下浣に「伊亭」で行われた酒宴を探りあげてみたい。旭莊の日記「日間瑣事備忘」⑦（以下、「備忘」と略称）同年六月一〇日の項に、同じく参加者の一人である高木側山から旭莊に酒宴の開筵を呼びかけ、同月二六日に実際に宴が催されたと記されている。宴は「皆裸程或臥此晚飲」と、皆が裸程（身をあらわにすること）になるまでの盛況ぶりであったことがうかがえる⑧。日記中に「伊勢伊亭主人」とあるが、「伊亭」については、どのような人物かはわからない。

なお、旭莊は、同月二八日（戊午季夏念八日宴）の酒宴にも参加している⑨。「備忘」で同日の項をみると、雨が降るなか、蜷川（現在の大阪市北区から福島区に存在した曾根崎川の別称）に船を浮かべ、橋下で酒宴を開いたようである⑩。ただ、旭莊は二六日の酒宴記録に「百吸一段」（百の息を吸って、一段を飲む）とあるように下戸であったようである。ところが、二八日の酒宴記録には「無息五段」（息絶さず五段を飲む）とある。旭莊はこの酒宴で揮毫した「串珠杯詩」において、醜原、焦遂⑪など、中国の酒客にまつわるエピソードを交えながら、「奇策」を練って杯の中身を酒ではなく「沙糖水」（砂糖水）に入れ替えていたことを詩中で明かしている。機知に富む旭莊の対応が微笑ましい。

なお、両日の他の参加者を確認しておく、五十川金雪（文化五く文久元年・一八〇八く六一）、阪上九山（文化七く慶応三年・一八一〇く六七）⑫、行徳玉江（文政一く明治三四年・一八二八く一九〇二）、高安丹山（天保八く明治三九年・一八三七

一九〇六）、高木侗山、愛田愛軒の六名がみられる。愛田愛軒については、素性を明らかにすることができなかったが、他の五名については旭荘との交流を持った人々であり、『備忘』にもその名前が散見される（高木侗山については後述）。

金雪は、名を緒、字を世隆、号を金雪又は石顛、通称七五郎。「中之島に住み、人名録には『書家部』『浪華名流記』弘化二年版、『聞人部』『浪華名流記』安政三年版」の項に掲載されている。『大阪人物誌』の金雪の項には「性酒を嗜むと物にも拘泥せず往々奇行あり」と紹介されており、管宗次氏は酒興にのつて詠じた金雪の詩文を提示されている¹²⁾。

九山は、名を弘祖、字を大業、号を九山、通称甚右衛門、南久宝寺坊に住み、中島棕隠（安永九→安政二年・一七七九→一八五五）に詩及び書を学んだという。『浪華名流記』（弘化二年版）には「書家」、「浪華風流月旦評名橋長録」（嘉永六年版）には「詩」、「浪華名流記」（安政三年版）には「聞人部」などに列せられている。

玉江は、名を直貫又は貫、字を仁卿、通称元慎。号は玉江の他、繪園、九柳十橋逸史などがある。行徳家は代々で眼科医を生業としていた。玉江の父・恭園は、篠崎小竹、小竹の娘婿の後藤松陰などと交遊を持っていたとされ、玉江は天保八年（一八三七）に篠崎小竹へ入門。また、旭荘が来坂した際には、葛園に連れられ面会し、その後は詩文や学問を学んだという¹³⁾。『浪華名流記』（弘化二年版・安政三年版）には「画家部」に配されているが、同書（安政三年版）には篆刻も善くしたとある。

串珠杯の酒宴記録帖について（一）

丹山は適塾門下生の「姓名録」にその名を確認でき、安政三年（一八六五）に適塾へ入門したとされる¹⁴⁾。幼名を季四郎、のちに丹山、道純と称したという。大坂・今橋の儒家・香川琴橋の四男として生を受け、一五才の時に瓦町の医師高安杏山の養子となり医業の道に進んだという¹⁵⁾。

「戊午季夏念八日宴」の参会者である香坡は、儒家、詩家として人名録に載る橋本香坡（文化六→慶応元年・一八〇九→一八六五）である。名を通、字は大路、通称半助、静庵、毛山人、戴盆子などと号した。上野沼田出身で、一五歳の時に大坂堀川の蔵屋敷に移ったという¹⁶⁾。大坂では篠崎小竹に学び、篠門四天王の一人と称された。天保九年（一八三八）、伊丹の明倫堂が設立された際には、初代教頭として漢学・習字・詩作などを教授した。安政四年四月に西遊の途に就くべく教頭を辞した。この香坡の跡を継いだのが、先述の摩斎である。乙巻には、香坡が描いた笠を被り帯刀する人物がおさめられている（図4）。香坡は安政五年四月に伊丹から大坂に移っており、この酒宴は香坡が来坂して間もない時期に開かれたものといえる。

青霞は『浪華郷友録』（天保八年版）八丁表、「書家」の項目に「藤青霞／本町心斎橋／藤市兵衛」とあるが、断定する資料に乏しい。「元治元年孟夏初六日」（一八六四年四月六日）の酒宴に参会している上田辨沖（文政二→明治四四年・一八一九→一九二二）¹⁷⁾は、大坂四条派・長山孔寅に師事した絵師である。明治一七年（一八八四）に設立された私立浪華画学校（樋口三郎兵衛校主）では日本画の教

授として教鞭をとった。耕沖は、串珠杯と戯れる人物を見開きにわたって描いている(図10)。串珠杯の飲み口によじ登り、中を覗いている二人の内、一人は今にも中に落ちてしまいそうで、なんとも愛らしい。酒宴の際に揮毫された可能性が高く、素早い筆致ながらも、墨の濃淡を描き分けている。耕沖四〇代半ばの作品とわかる点で貴重な作例といえよう⁽¹⁸⁾。

最後に、乙巻に記される酒宴の記録に最も多く登場する高木侗山について述べておきたい。彼の名を人名録などでは確認できなかったが、「備忘」の記録から侗山が旭荘と交遊をもっていたことは間違いない。なお、侗山の「高木氏書畫帖」の序文を、旭荘が記しており、その草案が残っている⁽¹⁹⁾。そこには、侗山について「篆刻家。無他嗜好。獨愛書畫」と記されている。なお、「住福井邑」とあることから、侗山も大坂で活動していた人物であった可能性が示唆される⁽²⁰⁾。加えて、乙巻の酒宴記録の中に八回も登場すること、酒宴の会主を務めていることから、少なくとも乙巻に記録がみられる時期の酒宴記録の所有者は、「高木侗山」であったといえよう。

ここまで、串珠杯とともに伝わる乙巻に収められた酒宴記録について考察してきた。酒宴の参会者について、全ての人物を明らかにすることは、筆者の力不足のために叶わなかった。しかし、ごく一部ではあるが、乙巻から見えてきた串珠杯の伝来についてまとめておきたい。まず、乙巻が作成された安政四〜元治元年の間、串珠杯の所有者は「福井村」の高木侗山であった可能性が高く、酒宴には大坂で活動していた人々が参会していたことが明らかとなった。とりわけ、記録から

は旭荘を中心に、彼の門弟を含めた交遊関係が垣間見えた。旭荘は詩集「梅墩詩鈔」(嘉永元年・一八四八)以後、その評判が高まり、彼のもとには多くの門弟が集ったという。記録帖をみてみると、彼らは教養を身に付けるとともに、酒宴に興じることでより心を通わせ、交遊を深めていたように感じられる。そのような点からも、串珠杯の酒宴記録帖は江戸時代末期における文化人の交流の一端を語る資料として貴重なものといえるのではないだろうか。

(1) 折帖の記録の中には「串珠杯」の他に「五段杯」の名称を付されている場合もある。本稿では籍書の記載に従うものとする。

(2) 神戸市立博物館編集「びいどろ・ぎやまん展・清涼な異国趣味」(神戸市健康教育公社、一九八三)、神戸市立博物館編集、発行「びいどろ・ぎやまん・ガラス」(二〇〇〇)。びいどろ史料庫の旧蔵番号は一九六〇・〇〇二。

(3) 掛斐高「江戸の文人サロン 知識人と芸術家たち」(古川弘文館、二〇〇九、一八三頁から引用)。

(4) 神戸松蔭女子学院大学名誉教授・棚橋淳二先生は、串珠杯のガラス素材は当時日本で製作されていた鉛ガラスの比重値に比べて2.4と低く、ガラスの融剤に硼砂が使用された硼硅酸ガラスであるという。それを踏まえて、串珠杯は中国からの輸入品、あるいは日本製のガラスであったとしても、当時使用していたものが破損し、明治時代以降に作り直された可能性があることを示した。また、

(5) 「金縷」とは、金本摩斎(文政一二〜明治四年・一八二九〜七一)と考えられる。摩斎は名を相親、字を善郷、通称願庵。出雲国神門郡高松村の神官の出身で、大坂に出て嵯峨小竹の塾に通い、漢学を修めた。安

政四年には、伊丹の明倫堂の二代教頭を務めている。伊丹市史編纂委員会編集『伊丹市史』第六巻(伊丹市、一九七〇)、一二四—二八頁。

(6) 鈴木清「酒令」(尾崎雄二郎・笠沙雅章・戸川芳郎編集代表『中国文化大事典』、大修館書店、二〇一三)、五五六頁。

(7) 廣瀬旭莊全集編纂委員会『廣瀬旭莊全集』日記篇七(思文閣出版、一九八六)八頁及び九頁。六月一日の項には以下のようにある。

高木洞山一通達乞覽願報可否洞山東日開旭莊夫子歸夫子■許下僕側十一吟社中矣、僕欲以本月天神祭後、日開旭伊勢伊亭以會社友兄請為僕先客夫子■曰乃客產物感謝諸洞山件與同社謀而報餘洋趣〇東十一吟社諸子曰何山欲以本月廿六日會于伊勢伊亭宿題夏日早起請會日過敝處同往東以小扇

(8) 乙巻に収載される「串珠杯詩」の草案と考えられる漢詩が「梅壇刺稿」(写本一冊)、『詩文未定稿』(写本一冊)にみられるという。乙巻収載分とそれらには相違が見られるため、廣瀬旭莊全集編纂委員会『廣瀬旭莊全集』詩文篇(思文閣出版、二〇一〇)、五九九頁から以下に全文を転載する。なお、(一)内は筆者による書き下しである。

串珠杯詩 載為高洞山賦

其形五層似串珠、每層容三合餘

(其の形は五層にて、串珠に似る、每層三合余り容る)

疑是象罔所探獲、飲中八仙識此無

(疑ふらくは是れ象罔を探獲する所、飲中八仙の此識る無し)

高館張筵夜將半、四座皆是高陽徒

(高館に筵を張り、夜將に半ばにならんとす、四座皆是れ高陽の徒)

五斗不復推焦遂、淋漓何辭到首滿

(五斗無遂を推し盡らず、淋漓何んぞ首滿に到らんとす)

美酒盛來珠光發、華燈影透燦燦乎

(美酒を盛れば珠光を発し、華燈影燦燦と透かす)

一吸五層驚悸動、前珠後珠相逐徂

(一吸にして五層揺動を驚し、前珠後珠は相逐に徂く)

唯疑兩珠在蛇口、泡泡起滅驚沸如

(唯疑兩珠蛇口に在り、泡が起ちては滅するは驚沸の如し)

一洗金谷襲驚令、連者將附劉章誅

(一洗金谷襲驚令、連者は將に劉章の謀を附さんとす)

若不能飲以詩罰、吾人擲頭獨長吁

(若し詩罰を以て飲む能はざれば、吾人頭を擲きて独り長吁す)

酒伯元來兼詩伯、論詩苛酷不教粗

(酒伯は元來詩伯を兼ね、詩を論する苛酷を教さず)

將飲酒耶我量淺、將作詩耶我腸枯

(將に酒を飲まんとする耶、我が量は淺く、將に詩を作らんする耶、腸枯る)

進退已谷得奇策、一吸五層忽然虛

(進退已に谷は奇策を得、一吸五層忽然として虚し)

誰因內有沙糖水、四座相視各胡盧

(誰が因りて内に沙糖水が有ろうか、四座各胡盧を相視る)

(9) 「偶忘」には、同日の酒宴について以下のようにある。

(前略)：移酒具上布初約橋下納涼以雨中無所見入規川水晚漲舟觸左岸

得環舟子陳碑田堯久之下二丁山入廣木亭何山為主召妓■置行酒予不堪飲

乃託欲眠臥於別室■(得々)：絶……(中略)：後座衆問何為乃所作何山

悅命主婦買紙乃揮灑(後略)

(10) 柳原は中国後漢の學者、酒を好み一晚中飲み明かしても酔うことはな

かつたとされる。焦遂は、唐時代を代表する八人の酒豪とされる(飲中

八仙の一人。普段は円滑に話を進められないようであったが、酒を飲むと雄弁になったとされる人物。

- (11) 九山の生没年は、『浪華名流記』（安政3年版）にある「庚午生」から算出した。

- (12) 管宗次「五十五川金書（金書詩稿）について」安政三年二月廿五日（九月四日）『京大坂の文人 続々』（和泉書院 二〇〇八）。

- (13) 水田紀久「行徳玉江の生涯」（『日本書誌学大系43 日本篆刻史論考』青雲堂書店、一九八五、二八〇～三〇八頁）。

- (14) 柳溪昇「緒方洪庵と通塾」（大阪大学出版会、一九九六）。

- (15) 芝哲生「通塾門下生に関する調査報告（3）」（『通塾』第15号、通塾記念会、一九八三）。芝氏によると、丹山は大坂の儒者香川亭橋の四男で、幼名を秀四朗という。一五才の時に医師六代高安杏山の養子となり、丹山と称した。安政三年（一八五二）に通塾に入門。杏山の没後は医業を継いだとされる。

- (16) 前掲書5、一八～二四頁を参照。

- (17) 池田市立歴史民俗資料館編集・発行『日本画家上田耕夫・耕沖・耕甫』（一九九四）では、耕沖は文政三年生まれの可能性が指摘されている。

- (18) 同書には、「耕沖の制作年が明確となった青年・壮年期の本格的な作品を見出すことができていない」とある。耕沖の作品が三〇件程度収められているが、その多くが明治期以降のものであり、江戸期の作品は写生帖などの四件となっている。

- (19) 前掲書7、七三〇～七三一頁。

- (20) 摂津国豊島郡、及び同国島下郡の福井村が候補として挙げられるが、断定することは難しい。

〔付記〕

本稿で利用した人名録『浪華名流記』（弘化二年版、安政三年版、『浪華郷友録』（天保八年版、『浪華當時人名録』（嘉永元年版）は、森統三、中島理寿編『近世人名録集成』第一巻 地域別編（勉誠社、1976）所収版を参照した。

また、記録帖の翻刻、及び読み下しについては当館学芸員小野田一幸氏、高久智広氏、石沢俊氏にご教示いただきました。末筆ながら深く感謝申し上げます。

『酒宴記録帖』乙・安政五(元治二年)翻刻

「凡例」

・表記は原文のまま。文中の／は原文の改行位置を示す。また酒宴ごとに一行の空白を設けている。

・判読不明の箇所は■で表記する。

・(図)は翻刻文の後に、まとめて掲載している。

〔朱文長方印〕「青龍」

(図1)

〔白文方印〕「牧士光」、〔朱文方印〕「天有」

〔朱文長方印〕「古土人」

五段杯酒令亭

終日不醉嘆邨原之健五斗卓／然稱無遂之豪比持以善飲願／爾若夫五段之盞教會之酒么麼／也滴瀝也皆視以為一鼓舌不／盡耳然其製疊々逐段漸大以／至于下底又圓而不可堅且酒令禁／飲未盡而息其始飲也纔瀝其／唇而一段且盡二段之儲隨泄忽／然溢而咽于喉然猶可堪而至三／段四段酒氣已塞于胸頭上隨矣／或嘖或嘔終叩頭而謝於航錄事／凡如此者十八九矣備有一飲盡焉／者數事登姓名於此帖以褒之／者寸鐵可以煞人則此么解滴瀝／亦可以使邨原焦逐之徒不敢稱／誰於酒軍焉豈不愉快哉豈／不愉快哉 安政丁巳陽月 金観撰〔白文方印〕「観字善郷」、〔朱文方印〕「生■」

(図2) 雲城

串珠杯の酒宴記録帖について(一)

〔歲在〕安政五年 戊午夏／六月下浣於伊亭開宴

三吸一盃 五十川金雷

一吸一 杯 阪上九山

五吸一 杯 行徳玉江

四吸一 杯 高安丹山

一吸一 盃 高木側山

三吸二 段 愛田愛軒

百吸一 段 廣旭叟

(図3)

立入山機醉筆

戊午季夏／念八日宴

無息五段 旭莊

代酒以沙糖水

酒五吸一 杯 香坡

一吸一 盃 青巖

一吸一 杯 側山

(図4)

他不擊余々／擊他廟堂／和職議如何／両刀腰畔徒然／在袖尔春語君

落花 毛山人

〔白文方印〕「芳心自同」

廟堂神策矣雄藩天／下方知

皇■〔孩力〕尊夜國盡忠人競／唱勲功誰餘轉軋坤

洞山人正〔白文方印〕「高上正」、「朱文方印」「洞山」

〔図5〕

夢酌清談／意味深長

鴻雪山人〔白朱文聯方印〕「鴻」「雪」

戊午仲冬友鹿洞小集

三吸一盃 西尾西陀

二吸一盃 寺川梅汀

一吸一盃 洞山

一吸一盃 霞城

〔図6〕戊午仲冬寫／石峰圖

串珠杯詩／戲賦

〔朱文楷印〕「風月」

其形五層以串／珠每層容酒三／合餘略是象／罔所樣獲飲中／八偶識

此無／高館張筵夜將／半四座皆是高／陽徒五斗不復／推焦遼淋漓何

／粹到美滿美酒／盛來珠光發華／燈影透燦々乎／一吸五層觸搖動／

前珠後珠相逐但／慎如隋珠在蛇口／泡々起滅霄沸／如一洗金谷陳腐

／令通者將附劉章／珠若不能飲以詩／罰吾人搔頭獨長／呼酒伯何料

兼／詩伯論詩精細不／赦粗將飲酒耶／我量淺將作詩／耶我尔枯進退

已／谷酒奇策一吸五／層忽然虛誰罔內／有沙糖水四座／相視名胡處

旭叟〔白文方印〕「廣瀬謙印」、「白文方印」「廣瀬吉甫」

己未正月念九日

無息吸盡者三／睪友／致軒

無息吸盡者一／霞城／極齋／榮是

■也珠袋 陸阿龍

咸豐庚申夏六月於友鹿洞

吃下五谷一盃 劉芸齋

喫下一谷九盃 高洞山

全 高致軒

〔図7〕

辛酉秋月／寫於友鹿／洞中

鴻雪山人〔白文方印〕「杏華春雨」

文久元年辛酉晚秋念一日

二吸二盃 長遊

一吸一盃 致軒

三吸一盃 鴻雪

一吸一盃 霞城

全 洞山

全 高潘婦人絹
全 梶原村婦濃
三吞 長遊

壬戌夏四月初七飲十松溝／亭西窓之下

一吸一盃 圓覺寺 一心

四坐呼妙而不太急徐々／吸盡可謂古今飲徒英雄矣

二吸一盃 圓明寺 大量

一吸一盃 玄通寺 靈瑞

壬戌秋閏八月旬飲／友鹿洞

吃下一吞一杯 宗昱

吃下二吞二盃 致軒

(圖8)

偏愛白／衣酒／何嫌青／如霜

真(白文聯印)「真」、[浦]

壬戌秋九月十三日夜月下開筵酒／酣主人以串珠杯稍飲初不能飲漸／

而一吸飲烏

青浦生(白文方印)「真印」

壬戌十月幾望同雙石老人／投友鹿洞々主置酒

一吸一盃 致軒

串珠杯の酒宴記録帖について(一)

一吸一杯 糾園
一吸一盃 二柳
一吸一杯 洞山
一吸二段 雙石

餘三段則致軒代吸

寒邸春三月十七日

三吸一盃 多田宗是

全 一盃 井隆

一吸一盃 洞山

全 一盃 霞城

全 一盃 致軒

[朱文精円印]「月到天心」

予訪洞山君々命工鑄／大鑑偶成引予觀之／傍置酒各傾串珠杯／處飲

醉餘揮毫／寫其意

香舟中井隆[白文方印]「吊」、[朱文方印]「喬」

(圖9)

[白文精円印]「墨樵」

[白文方印]「芳心自同」

文久癸亥春三月欲獻大鑑於／高槻藩主永井侯命工鑄之名／日堅城已
成置于我堂上偶中井／香舟見過共飲其傍乘興夜其／因余錄其銘

願兮願兮聲震海天是磨是磨／我城以堅

洞山高木正〔白文方印〕「正印」、〔朱文方印〕「弑止」

〔図10〕耕冲〔花押〕

元治元年歳在甲子孟夏／初六日

数吸二杯 島本玉麟

一吸一杯 神田二柳

一吸一杯 高木長遊

数吸一杯 奥村熊三

二吸一杯 吉田格要

二吸二杯 高木致軒／願下滴淋漓

一吸一杯 上田耕冲

数吸二杯 高木松英

秋爽〔朱文方印〕「爽秋」

〔図11〕

僕始訪高木氏酒酣／主人出串珠盃使僕飲／六吸而尽一杯致軒君／置
左手于座上飲一吸一／杯然滴瀝灘胸襟／洞山君尋儻手于膝上飲不見／
一滴瀝僕伏其手練

秋爽再題〔朱文長方印〕「爽秋」

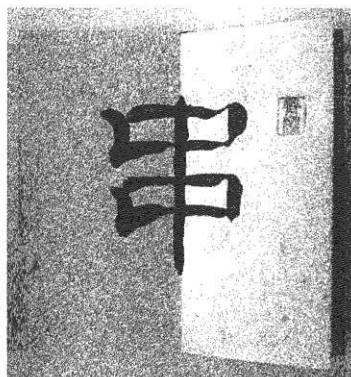
〔白文楷四印〕「採補」

誰所無嗜／再吞酒■／約弄七盤／虛酒荒九山／五段杯

〔白文方印〕「弘祖字大業」、〔朱文方印〕「九山弑号柳■」

元治二年 孟夏念六／醉 淩漫題以換跋

【押図】
（図1）



串珠杯の酒宴記録帖について（一）



(図2)



(図3)





(図4)



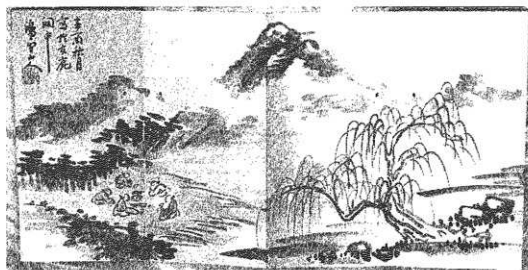
(図5)



(図6)



(図7)





(図10)



耕沖

(図11)



秋英

